

## 生業とは何か

生業という言葉は、小規模の沿岸漁業等に対して使われることが多い。たとえば「沿岸漁業は産業ではなくて生業だから、ただ単に経済行為として沿岸漁業を捉えても、その本質は理解できないし、経済効率性だけからそのあり方を論じても政策的には意味がない。」というような、使われ方をする。こういう説明には、何となく納得してしまうのだが、いったいこういう言葉が何を言っているのか、実際のところ私にはわからない。「生業」：そもそも読み方からして怪しい。すぎわい、せいぎょう、なりわい、いろいろな読み方がある。広辞苑で意味を調べると、「せいぎょう（生業）：生活のための仕事、なりわい、すぎわい。」と書いてある。皆、生活のために、収入をえるために仕事をするのだらうから、これは単に職業のことだと説明しているにすぎない。しかし、先ほどあげた例では、普通の職業とは違う意味がある、普通の産業とは違った意味があるという意味で使われている。多くの場合、生業は職業とは違う何か特別な意味で使われるが、その違った特別な意味はどこにも説明されていない。しかし、生業と言われたときに、なんとなく納得しておかないと、無知な人あるいは大人げない人と受け取られそうなので、納得したようなふりをすることになる。こういう言葉は多い。

こういう部分は、本当はきちんと議論すべきでだ。どこがどう違っているのか、その違いの、個人個人の生き方における意味、社会や人類史的な意味をとらえておくことが重要だ。たとえば、TPP 論争などで、農業保護の必要などを主張するときにも、産業としての比較優位の問題としてだけではなく、地域の農業を維持することの重要性を主張する場合、この部分をきちんと説明しておかないと、相手を納得させられない。

最近、沿岸漁業というのは、かなり変わった産業で、漁業者も変わった人たちだと思うようになった。あるいは、社会の変化によって多くの人が変わって行った結果、本来の特性を持った人たちが少数派になっているということかもしれない。よくわからないのだが、どこがどう違っているのか、言語化して記述することは研究者の仕事だらう。